A stylized world map in white and grey tones, with numerous small yellow dots scattered across the continents, representing global locations. The map is centered on the Pacific Ocean, with North and South America on the left and Europe, Africa, and Australia on the right. The word 'YOKOHAMA' is highlighted in yellow on the Japanese archipelago.

Yokohama National University
Organization for Local Collaboration Networking
Global-Local Education and Research Center

横浜国立大学
地域連携推進機構
地域実践教育研究センター
Annual Report
2019-2020

● YOKOHAMA

Think Globally,
Act Locally.

地域実践教育研究センター
Global-Local Education and Research Center

CONTENTS 01

地域交流科目 [学部 副専攻プログラム] 02-13

Under graduate Sub-major program "Local-exchange Subjects"

地域課題実習

- ・横浜うみみらいプロジェクト
- ・みなとまちプロジェクト
- ・おおたクリエイティブタウン研究プロジェクト
- ・YNU × TOYOTA/NISSAN プロジェクト
- ・モビリティデザインの実践
- ・ハマ屋台プロジェクト
- ・まちに開いた交流の場デザイン
- ・シェアハウスのデザイン
- ・和田べんプロジェクト
- ・ワダヨコ
- ・ニュー・ニュータウン プロジェクト
- ・市民活動を体験して考える協働型まちづくり PJ
- ・ローカルなマテリアルのデザイン
- ・アグリッジプロジェクト
- ・都市の自然を楽しむライフスタイル
- ・かながわ里山探険隊
- ・データで捉える地域課題・地域経済
- ・横国ネパールプロジェクト

地域実践アワード

アンケート結果

地域創造科目 [大学院 副専攻プログラム] 14-15

Graduated school Sub-major program

"Creative education program about local problems"

研究 16-18

Research

-1. 研究の柱

- (1) 住みたい都市に関する研究
- (2) 防災・事前復興・復興に関する研究
- (3) 地球環境未来都市に関する研究
- (4) 里地里山の保全効果に関する学際的研究

-2. 地域研究

-3. 委託研究・寄付事業

- (1) 重点プロジェクト
- (2) 神奈川県 大学発・政策提案制度

地域連携推進機構 19

Organization for Local Collaboration Networking

- ・地域連携推進機構について
- ・地方自治体との連携協定
- ・Next Urban Lab
- ・水すまし基金

関連教員 20-21

The Relationship Professors

■地域交流科目について

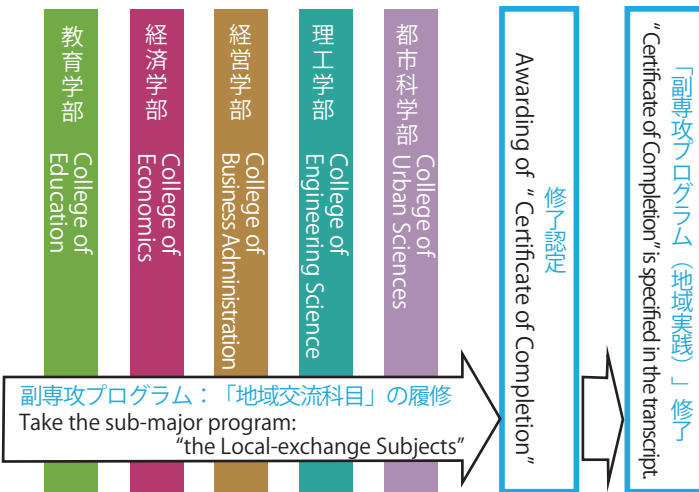
地域交流科目は「グローバルな視野をもって地域課題を解決する、先端的かつ複合的な実践能力を身につけるプログラム」として、横浜国立大学の全学部生が履修可能な副専攻プログラムです。

このプログラムは、①コア科目、②講義科目、③実践科目の3つの科目で構成されています。所定要件の10単位以上を習得すると、副専攻プログラムの修了認定を受けることができます。

■ About the "Local-exchange Subjects"

The Undergraduate sub-major program "Local-exchange Subjects" connects independent subjects from all departments to train students as young talent who can solve local challenges with a global perspective.

This program consists of ①Core-Lecture subjects, ②Special Lecture subjects, ③Practical subjects. Students can receive completion authorization when they acquire the prescribed credits of the sub-major program.

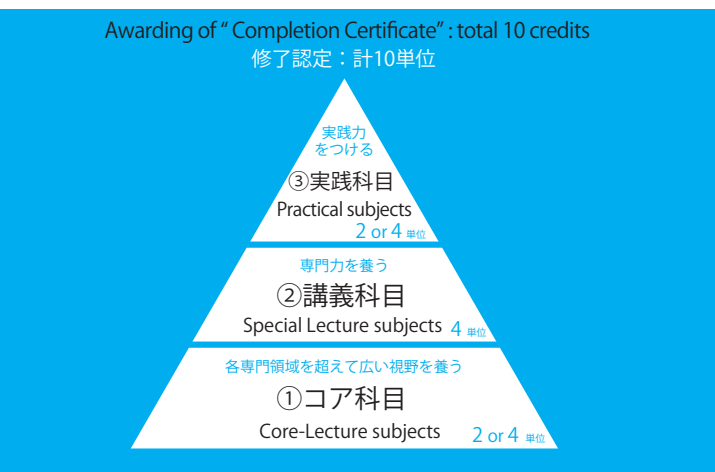


コア科目A:「地域連携と都市再生A(ヨコハマ地域学)」

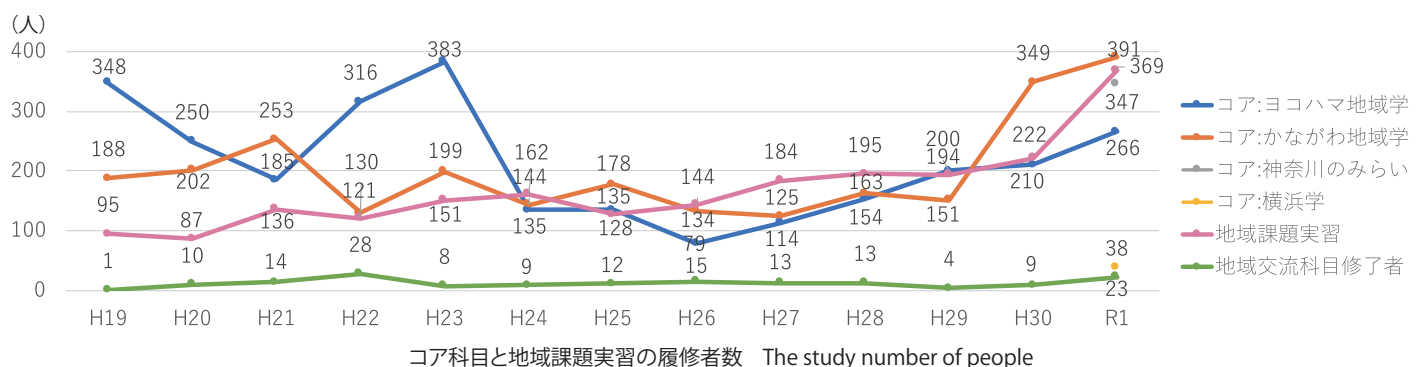
回	講義テーマ	講師
1	概論(1)オリエンテーション・横浜の成り立ち	志村真紀・内海宏
2	概論(2)横浜という都市を通して日本の近代化を語る	野原卓
3	概論(3)世界の中の横浜、日本の中の横浜	高見沢実
4	フィールド(1)都心地域の現状と課題	野原卓
5	フィールド(2)中間地域の現状と課題	志村真紀
6	フィールド(3)郊外地域の現状と課題	内海宏
7	今日の横浜の都市課題(1) ~人口減少社会に向けて~	稲垣景子
8	参加型授業(1)横浜の都市課題について調査する	志村真紀
9	参加型授業(2)横浜の都市課題について発表する	志村真紀・内海宏・秋元康幸
10	今日の横浜の都市課題(2) 国内外の港町における地域課題と再生モデル	志村真紀
11	地域再生モデル(1)クリエイティブシティと都市政策	秋元康幸
12	地域再生モデル(2)都市農地再生と地域まちづくり	内海宏
13	地域再生モデル(3)商店街と地域まちづくり	志村真紀
14	地域再生モデル(4)子どもとまちづくり	三輪律江
15	まとめ(3)「都市再生からみた大学と地域の連携」の最終討論会	志村真紀・内海宏・秋元康幸

コア科目B:「地域連携と都市再生B(かながわ地域学)」

回	講義テーマ	講師
1	オリエンテーション	志村真紀
2	政令指定都市(横浜市:SDGsへの取り組み)	信時正人
3	地域経済をどう巡すか	池島祥文
4	地方行財政	伊集守直
5	「みんなのまちづくりゲーム」の経緯~東日本大震災を踏まえた今後のまちづくりについて~	南三陸町ラーニングセンター(浅野・安藤)
6	箱根町	箱根町行政
7	(福祉と)地域経済	伊集守直
8	第1回参加型授業(みんなのまちづくりゲーム)	池島・志村・伊集
9	里地里山	小池治
10	エネルギー	大森明
11	第2回 参加型授業(みんなのまちづくりゲーム)	池島・志村
12	観光・インバウンド+レポート試験対策について	氏川恵次+志村
13	第3回 参加型授業(みんなのまちづくりゲーム)	池島・志村
14	レポート試験	志村真紀
15	第4回 参加型授業	池島・志村

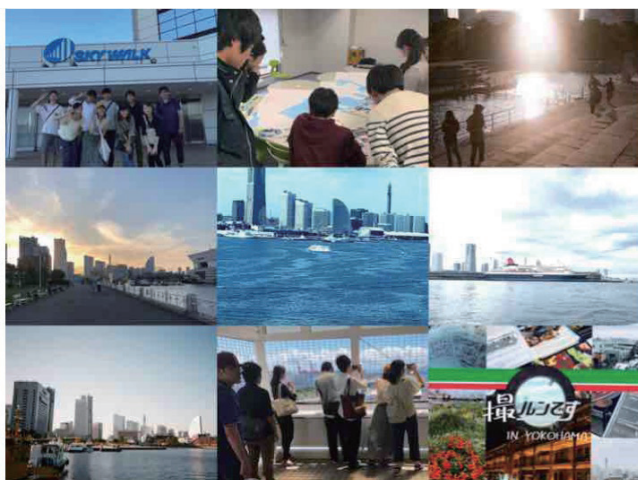


かながわ地域学: 参加型授業で用いる「みんなのまちづくりゲーム」時の授業風景





横浜うみみらいプロジェクト The Umimirai project in Yokohama



海をテーマに、
学生の立場から横浜をより良い街にしていこう
Making Yokohama a better city
from a student's perspective with the theme of the sea

横浜うみみらいプロジェクトは UDC-Sea の活動理念をもとに 2018 年に結成された学生団体です。UDC-sea は大学の教授をはじめ、各専門分野で大きく活躍をされている社会人の方や横浜市の職員の方が集まった有志の団体です。そして UDC-Sea の活動理念とは、「横浜を海に開かれた海都としてもう一度捉え直し、海とともにあるまちづくりを市民・企業・大学・行政の垣根を超えて考える」ことです。横浜国立大学の学生にとって、横浜という都市は非常に大切な存在です。横浜うみみらいプロジェクトではそんな横浜をより良い都市にするために、海というテーマから、学生の立場で何ができるかを考えています。

私たちの活動内容は 3 つに大別できます。1 つは UDC-sea で定期開催される各分科会の討論会に参加し、活動報告や提案をすること、2 つ目は定期ミーティングで横浜の良い点や課題について考え、課題については改善策を考えることです。そして 3 つ目は、ミーティングで出た良い点の発信や課題の改善を行うためのイベントを実施することです。2019 年度は横浜の観光資源を発掘し発信するための企画として「撮ルンです」企画を実施しました。

2019 年度は横浜の抱える課題の調査に多くの時間をかけたため、今後は実践的な活動を増やしていきたいです。前述した「撮ルンです」企画をはじめ、エネルギーの視点から環境問題を考える「エコツアー」企画、減災の視点から横浜を災害に強い都市にすることを目標とした「地震対策室」企画など様々な企画に持続的に取り組んでいきたいと考えています。

- 学生：10 名 / 担当教員：松田裕之、吉田聡、野原卓
- 連携・協力：UDC-sea
- サイト：
<http://ecorisk.ynu.ac.jp/matsuda/UDCSEA/index.html>
https://twitter.com/yoko_umimirai



みなとまちプロジェクト The Port City Project



清水港 120 周年
地元の人々と共に創り出す清水のみらい
120th anniversary of Shimizu port opening
Creating the future of Shimizu, together with locals

みなとまちプロジェクトは、静岡県清水港の日の出埠頭および旧川湊地区を中心とした地域で活動しています。清水は、富士山と駿河湾を望むことができ自然にあふれ、清水港はお茶の輸出量がかつて日本一であった歴史があります。近年では客船の来航による外国人観光客が増加しているため、本 PJ では当地域のブランディング要素を結びつけた活性化を目的としています。

今年度は、昨年度までの現地での調査活動や企画を踏まえて、「実践」活動に力を入れました。清水港開港 120 周年関連事業として 10 月にミナトブンカサイを実施し、プロジェクト内で Teatism 班・次郎長班・トークセッション班・会場班・音楽班等の 5 つに分かれて、様々な活動を行いました。Teatism 班は、お茶を介した人と人との繋がりを伝えることをテーマに、手摘み・手揉みによる茶葉を使った商品のブランディングデザインとカフェ運営をしました。次郎長班では、清水の発展に貢献した清水次郎長にまつわる次郎長商店街の活性化を目標に、マップ制作やガイドを行いました。トークセッション班では、「ちょっと先の清水のみらいを創造する」というテーマで、日の出埠頭のみにらについて、地元の方々と巻き込んだディスカッションを実現させました。また、会場班では廃材のパレットを使った空間作りなど当日の会場作りを行い、音楽班では港の倉庫を舞台に音楽を介した人の交流を生み出しました。

来年度は、次郎長生誕 200 周年と関連させたブランディングによる地域活性化事業や、Teatism に関わる活動の発展、日の出埠頭の活用について、さらに深く携わっていく予定です。

- 学生：13 名 / 担当教員：志村真紀
- 連携・協力：常葉大学、東京大学、九州大学、茨城大学、静岡理科大学、静岡市経済局海洋文化都市推進本部、静岡県清水港管理局、株式会社 鈴与、株式会社 ボクラノマチ、ヤマハ発動機株式会社 / 静岡県立大学 岸昭雄 研究室 / モビリティデザインの実践 PJ



おおたクリエイティブタウン研究プロジェクト The OTA Creative Town Study Project



モノづくりのまちづくり ～工場のまちの魅力を次世代に継承する～

Town planning utilizing manufacturing
- Passing down the charm of the factory town to the next generation -

大田区は中小規模の工場が日本一集まる街として、工場を中心とした地域コミュニティを形成してきました。しかし近年は職人の後継者不足による工場自体の廃業に加え、廃工場跡への小規模住宅の建設及びそれとともに地域外からの新規住民が増加していることもあり、工場や職人と住民との関係の希薄化や工場の街としてのアイデンティティの消失が危惧されています。それらを受け、このプロジェクトでは工場や職人と住民が良好な関係を築く街を目指し、モノづくりを活かしたまちづくり活動を行っています。

町工場の職人が主体となって年に一度、工場を一般の方に向けて開いて見学やワークショップを行う「おおたオープンファクトリー」に学生企画として参加しています。今年は「WAZAPARK」と題し、町工場での廃材から作ったからくり装置や職人による子供向けの一日授業等、子どもたちが遊びながらモノづくりの魅力を体感できる企画や空間の設計を行い、当日は500人超の方が会場を訪れました。また、町工場を改装した拠点「くりらぼ多摩川」とも連携し、そこでの活動を外部に発信する「くりらぼ通信」の制作や、開催される各種ワークショップのお手伝いにも随時取り組んでいます。他に、工場の後継者問題の解決に向けて工場と工場働きたい人たちを繋ぐ「Biz OOF」にも協力し、参加工場のパンフレット制作等を行っています。

今までの取組みを継承・発展させながら、地域住民の方がもっと日常的に工場の街の魅力を感じられる「地域への浸透」や、工連等とも連携を行いながらモノづくりを起爆剤にしたまちづくりを大田区全体で進める「活動規模の拡大」を目指していきます。

- 学生：10名 / 担当教員：野原卓
- 連携・協力：一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター、一般社団法人大田観光協会
- サイト：<https://www.o-2jp/mono/>



YNU × TOYOTA/NISSAN プロジェクト The YNU × TOYOTA/NISSAN Project



小型電気自動車を利用した 地域での新たな交通手段の提案 Proposal of new means of transportation in areas using small electric vehicles

交通の便に難がある国大周辺の地域において、環境に優しく、どんな年代の方でも気軽に運転できる小型電気自動車「チョイモビ」を1つの交通手段として提案する。チョイモビの利用を促進させることで、大学周辺の地域の活動を活性化させることが目的だ。この小型電気自動車の導入は、持続可能な開発目標(SDGs)の「11. 住み続けられるまちづくりを」と「13. 気候変動に具体的な政策を」の2つを同時に達成することが可能である。

本プロジェクトは、今年から始まった新たなプロジェクトなので、チームビルディング等を含めた基礎的な内容が活動の中心となった1年間だった。今年は、「チョイモビの試乗」「チョイモビの特性からメリットとデメリットの分析」「利用できる場面の洗い出しとターゲットの設定」を中心に行い、自家用車や電車などの対抗する移動手段との差別化を図るためのチョイモビ利用のモデルケースを考案した。チョイモビの利用方法に関して、「ビジネス的視点」と「地域活性化の視点」の2軸を中心に開発元である、日産自動車株式会社に提言を行った。

来年度以降の活動では、羽沢横浜国大駅 - 大学間を結ぶ新たな移動手段として、横国生を対象としたモデルケースを考案し、実装を目指す。大学でも駅でも乗り捨て可能で学生同士シェアして利用するシステムを想定している。また、大学近郊だけでなく、様々な性質の地域で実車を繰り返すことで、小型電気自動車の新たな性質を見出す。また、他の地域でも小型電気自動車の活用方法を考える。

- 学生：13名 / 担当教員：氏川恵次
- 連携・協力：日産自動車株式会社



モビリティ・デザインの実践 The practice of mobility design



都市交通デザインの提案を通じて、
人々の移動を、まちをより豊かに
Pursuing the various mobility
and the wealthy city by the urban traffic design

モビリティ・デザインの実践では、人々の移動のしやすさ、すなわちモビリティを総合的にデザインする考え方を、具体的な地区での改善提案活動を通じて学ぶことを目的としている。これまでの交通計画や都市計画での講義や演習の中で十分には培われなかった、まちづくりと移動環境のつながりや、交通手段間の連携などについてのプランニングマインド感覚を身に着けるべく、活動を行っている。

本実習ではテーマごとに班単位で活動を行っており、2019年度は以下の7テーマを扱った。各班で週1回以上話し合いや現地調査を行い、学内で行われる年4回の報告会および学外におけるその地域の方々や企業に向けた発表会を通してその成果を披露している。

これらテーマの一部は2020年度も継続を予定しており、加えて新たな課題にも着手する予定である。引き続き、幅広い視点から交通と都市を議論していきたいと考えている。

- ①公園敷地内における低速トラム走行実現に向けた検討
- ②上野浅草を結ぶ街路空間でのトラム導入の検討
- ③地下鉄駅構内における移動時間に関する調査
- ④沖縄のバスターミナルの課題の可視化と改善策の考察
- ⑤羽沢横浜国大駅開業効果速報
- ⑥東広島でのバリアフリー問題とMaaS
- ⑦路面プロジェクションマッピングによる交通安全の模索

■学生：24名 / 担当教員：中村文彦, 有吉亮, 三浦詩乃
 ■連携・協力：社会実験ユニット souple、NPO 法人 365 プノイチ、お茶の水女子大学 小崎 美希 助教、東京都市大学都市生活学部 中島伸 専任講師
 ■サイト：横浜国立大学 交通と都市研究室 <http://www.cvg.ynu.ac.jp/G4/MD>



ハマの屋台プロジェクト The Hama no Yatai



移動式屋台を使った
まちの中の空間づくりについて考える
Creating spaces to communicate
in a town with mobile stalls

まちのにぎわいを生み出すツールとして「ほどわごん」を提案し、それぞれの活動場所の需要や状況に合わせた移動式屋台の制作と運用を行ってきました。今年度中心に行った関内・関外エリアにおける活動では、屋台制作だけでなく、誰もがとどまり、交流し、安らげる空間「ゆたかなイばしよ」をまちの中につくることにも取り組みました。

保土ヶ谷地区の「ほどわごん」、南万騎が原エリアの「みなまきわごん」は制作の段階を終え、地域課題実習の他PJや地域の方々にも利用してもらう機会が生まれてきました。今年度の制作活動として、まずレモネードスタンドの普及活動をしている子どもたちの意見を取り入れたレモネードスタンドを設計・制作し出店しました。そして、昨年度から話し合いを進めてきた関内・関外エリアでの活動では、様々な観点からこのエリアのまちづくりを考えられている方々とチームを組み、制作やワークショップの運営などを通して空間づくりについて考え、新たな移動式屋台「関内わごん」を制作しました。仮説北仲 BRICK で本イベントのイベント「へんしんとしょかん」を主催し、制作した屋台がつくる空間に人々が滞在する様子を体感したとともに、今後の使い方を考える上でのヒントとすることができました。

移動式屋台を通して色々な方々と活動をさせていただいてきたこれまでを活かし、もう一度、“移動式屋台にできること”を考えることが大切です。そのうえで、「関内わごん」では、今後更に多様な使い方を検討し、必要な制作活動を行っていきます。また、これまでに制作した屋台の適切な運用方法についても引き続き試行錯誤したいと考えています。

■学生：12名 / 担当教員：野原卓
 ■連携・協力：常盤台地区連合町内会、ゆたかなイばしよ運営委員会、レモネードスタンド普及協会
 ■サイト：<https://twitter.com/hamanoyatai>



まちに開いた交流の場のデザイン

The design of a place for communication in the town



CASACO
×
YOKOCO

地域に開かれた空間「CASACO」の 新たな使い方の提案

The proposal of new usage of "CASACO",
a space open to the community

野毛山公園の裏の住宅地にある「CASACO」は、二軒長屋を改修し2Fをシェアハウス、1Fを地域に開いた場として2016年4月にオープンしました。このプロジェクトでは地域の価値向上を目指して1Fの場の使い方を提案し、運営者の理解を得られれば実行しています。学生は完全ボランティアでもなく、「稼ぐ」ビジネスを立案するものでもなく、中間の方法で活動を行い、全国に広がりつつあるソーシャルビジネスの方法論を実践を通して学ぶ活動です。

—昨年に学生団体「YOKOCO（ヨココ）」を発足させ、複数の班で活動を展開しました。

【洞窟ものがたり】紙と針金で室内の空間を改変し、昼間は子供たちの遊び場、夜は隠れ家バーとしてイベントを開催しました。いつもと違う空間の使い方を提案しました。

【まちあるき】CASACOとその周辺地域の課題や魅力を探るためまちあるきをし、模造紙にまとめ意見交換をしました。また見つけた魅力をCASACOが発行する新聞に載せて発信しました。

【キャンドルナイトWS】毎年行われているCASACOのイベントのコンテンツとして、クリスマスオーナメントを作るWSを開催し、訪れた子供たちとの交流を行いました。

CASACOの運営体制に変化がみられた1年で、周辺施設との連携が起きた一方、ある程度決まった地域の人との関わりが目立ちました。私たちは、新規の訪問者を意識した地域への開き方を考察しながら、引き続き地域の価値を上げる活動を継続していきたくと考えています。

- 学生：30名 / 担当教員：江口亨
- 連携・協力：CASACO（カサコ）



シェアハウスのデザイン

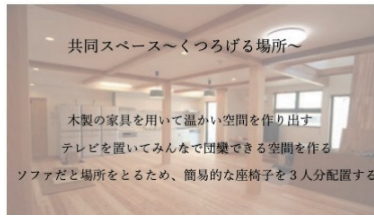
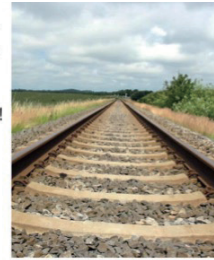
Shared House Design –Create your ideal house by yourselves-

シェアハウスを
しようと思った
きっかけ

通学時間が長すぎる！

A子：40分（電車通）
B子：2時間
C子：2時間30分
（通学する際から片道の時間）

大学生の貴重な時間！
通学に何時間も
かけていけない！



共同スペース～くつろげる場所～

木製の家具を用いて温かい空間を作り出す

テレビを置いてみんなで団欒できる空間を作る

ソファだと場所をとるため、簡易的な座椅子を3人分配置する



学生時代にしかできない 楽しい暮らしを手に入る

Get your happy life
that can only be done during student

住宅はたくさんあるがどれも代わり映えせず、住んでいるといつのまにかその住宅に慣れてしまっている。しかし、本来住みたい方はひとそれぞれのはず。もっと個性のある住宅が増えるべきだろう。

そこで本プロジェクトでは、大学近辺に学生が住むシェアハウスを増やすことを目標に、住み手となる学生自らがシェアハウスをデザインする。住まいをデザインする想像力、予算や住み手の要望などの相反する要因を総合的にまとめる構想力、また、これらを説明するプレゼンテーション技術を学ぶ。

実際に住むことを前提に、まず同居人の候補を探した。次に、自分が住みたいイメージを膨らませながら、リノベの情報を雑誌などから収集したりDIYリノベの体験をした。そしてインターネットで希望に合った住まいを探し、そこに住むことを想定して、現実的な改修プランを提案した。

改修プランは、女子学生3人のシェアハウス。家賃はひとり4万円（光熱費込み）で想定し、それぞれの個室と共有のリビングを設計した。また、DIYでつくる棚などの家具もデザインした。

今後の可能性としては、今回まとめたデザインを、1～2年のうちに実現する。

- 学生3名 / 担当教員：江口亨



和田べんプロジェクト The Wadaben project



和田町の声を聞き
ゆるキャラが笑顔を届けます
“Yurukyara” makes wadamachi smile

和田べんプロジェクトは、2001年から和田町商店街と大学が中心となって行っていた地域活性化活動から派生したプロジェクトであり、商店街で作られる弁当を大学構内で“和田べん”として販売することから始まったプロジェクトです。当プロジェクトは今年で15年目を迎え、今ではその活動は弁当販売にとどまらず、横浜国大と和田町をつなぐコーディネーターとして、地域活性化を目的に幅広い活動を実践しています。

活動内容としては、大学構内での弁当販売、和田町産の蜂蜜「WANEY」の広報活動、およびゆるキャラ「和田丸」による和田町内外での広報活動を活動の主軸におきながら、和田町で開催される数々のイベントでの企画・運営に携わっています。今年度は地域住民の方々の「地域がこうなったら良いな」という声を集め、町内会・商店街の会議に届けるゆるキャラポストの制作・設置を実現しました。また地域で年2回開かれるべっぴんマーケットでは、従来僅かであった子供たち向けのブースを新たに設け、和田丸の形を模した折り紙や塗り絵などを展開しました。着ぐるみの和田丸との交流の場も設けたことで、子ども達のにぎやかな遊び声が行き交い、イベントに新たな活気をもたらしました。

今後も、長い年月をかけて築き上げてきた地域の方々との信頼関係を大切にしながら、ゆるキャラ和田丸を活用した新たな活動を通じて、子ども達など新たな住民とも繋がりを広げていきます。「和田町が好き」そう言う人を1人でも多くすることが私たちの目標です。

- 学生数：10名 / 担当教員：高見沢実
- 連携・協力：和田町タウンマネジメント協議会、和田町商店街、和田西部町内会、盛光堂、ひまわり亭、アジアンキッチンあえら、大学生協、都市イノベーション学府建築都市文化コース都市計画研究室
- サイト：<https://www.facebook.com/wadaben.ynu>



ワダヨコ The Wadayoko



和田町の「地域的魅力」を向上させ
さらなる発展を目指す
Improving regional fascination and developing more

ワダヨコは2010年に横浜国立大学の学生が主体となり結成し、今年で10年目を迎えます。大学に近い和田町に住む地域の方々と大学生との交流の場を築くべく様々な活動を行っています。学生視点で和田町の魅力を汲み取り、それをまちに訪れる人やまちに住む人に感じてもらおうことを目指しています。

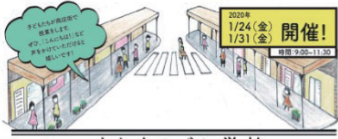
現在、まちの子どもたちに向けた「寺子屋活動」と、まちの交流の場を作る「企画活動」を主にしています。近年はそれに加え商店街、町内会、子ども会などのまちの組織と連携して既存のまちのイベントに関わるできるようになりました。例として、毎年2回行われる商店街主催の「べっぴんマーケット」では、外部からの出店が多くを占めていた状況を見直し、商店街が主役となるようワダヨコが店のPRを引き受け、長年続いていたイベントが新しい形に変わろうとしています。町内会との関わりにも変化があり、今まではイベント当日の手伝いのみだったところが準備段階から企画に携わったり、ワダヨコが企画するイベントにも積極的に関わってもらえたりするようになりました。

今年度では新しく始まった企画も多くあるので、それらを途切れさせることなく定着していくことを目指しつつ、更に新しい企画にも挑戦していこうと考えています。また、深まったまちの組織との関わりを大切に、同じ目標を持つ団体同士協力しあうことで、より深みのある活動を続けていきたいです。

- 学生数：27名 / 担当教員：野原卓
- 連携・協力：和田町タウンマネジメント協議会
- サイト：Instagram アカウント @wadayoko



ニュー・ニュータウンプロジェクト The NEW-NEWTOWN PROJECT



まちまるごと学校 ～商店街にあつまれ～

横浜国立大学の学生が全園上、「職業体験学習」を万騎が原中央商店街にて開催します。

職業体験学習は、子どもが職業について知り、職業の大切さや社会の仕組みについて学ぶ機会です。また、地域の活性化や商店街の魅力を伝えることも目的としています。

当日は、小学生が職業体験や、商店街の魅力を学ぶ機会です。また、職業体験の内容も、小学生が興味のある職業を中心に選んでいます。

職業体験の内容は、小学生が興味のある職業を中心に選んでいます。また、職業体験の内容も、小学生が興味のある職業を中心に選んでいます。

職業体験の内容は、小学生が興味のある職業を中心に選んでいます。また、職業体験の内容も、小学生が興味のある職業を中心に選んでいます。



万騎が原中央商店街の魅力 小学生に知ってもらおう！

Let elementary school students know the charm of central shopping street in Makigahara!

背景・目的

オールドタウン化しつつある郊外のベッドタウンを、豊かなニュータウンに再編することを目標に、まちづくり拠点「みなまきラボ」と協働して、地域資源である商店街の活性化に取り組んだ。商店街の魅力や近隣の小学生に知ってもらうことで、商店街が子供で賑わう楽しい空間となることを目的としてイベントを実施した。

活動内容の概要

今年は万騎が原中央商店街付近の万騎が原小学校の2年生と6年生各1クラスを商店街に招待し、2年生にはたい焼き屋さんでお店のこだわりやたい焼きの焼き方をクイズ等で知ってもらい、6年生にはたい焼き屋さんに加え、4店舗で職業体験を行った(チラシ参照)。また、6年生には職業体験には参加出来なかった店舗についても知ってもらうため、店舗の魅力をヒアリングした内容を張り出し、小学生に商店街を回ってもらうクイズラリーも併せて実施した。

今後の可能性

今年は昨年よりも多くの店舗に協力していただいてイベントを実施することができたほか、小学校ともつながりを持つことができた。来年度以降も同様なイベントを開催することで、地域の子供たちにとって商店街が居心地の良い場所となり、商店街を継続的に利用してくれるようになるのではないかと期待している。

■学生数：9名 / 担当教員：野原卓

■連携・協力：オンデザインパートナーズ、みなまきラボ運営委員会、万騎が原中央商店街、相鉄ホールディングス、横浜市、万騎が原小学校



市民活動を体験して考える協働型まちづくりPJ NPO Internship project



関心ある社会問題を選んで取り組む NPO インターンシップ！

NPO Internship project which we can select and try what we are interested in.

横浜市は国内でも有数のNPO法人の活動が盛んな自治体である。また、市民のニーズに合わせて発足したそれぞれの法人は、子どもの教育支援や高齢者を対象とした福祉系、芸術などを専門領域とした文科系、環境啓発、コミュニティづくりを含めたまちづくり、フェアトレードなど多種多様な分野をカバーしている。様々な社会問題に取り組むNPO法人にインターン生として参加することで、種々の課題やNPO法人の活動の現状に向き合い、また課題の改善に携わることで、自らのこれから担うべき社会的役割を自覚する。

NPO法人アクションポート横浜主催の、NPO法人とインターン先を探す学生のお見合い会に参加し、インターン生として参加するNPO法人を選択する。夏休みのみの短期インターン、希望によっては1年近くに渡る長期のインターンを行うことができるNPO法人もある。夏休み中、また夏休み以降に何度か、他大学や自校内のインターン生とミーティング・交流を行い、お互いの活動への理解や知識を深める。各個人のインターン先での活動については、下記のリンクからぜひ確認してもらいたい。

それぞれの活動について共有したことで、NPO法人の活動に対し理解を深めることが出来た。一連の経験を通して得られた知識や経験は大学での学習に活かすことができる。更に、インターン期間が終わってからもインターン先との関係はなくなる訳ではない。引き続きボランティアスタッフとして参加すること、また活動を追うなど社会貢献の機会を得られる。

■学生数：7名 / 担当教員：志村真紀

■連携・協力：NPO法人アクションポート横浜、
多数のインターン受け入れ先 NPO法人

■サイト：WE21 ジャパン (金田) <https://onl.jp/G9SCfbv>
認定NPO法人 アクト川崎 (黒澤) <https://onl.jp/SNnEpmF>
教育支援協会南関東 (坂本) <https://onl.jp/aGZ87Cn>
片倉うさぎ山プレイパーク (佐々木) <https://onl.jp/yyywKpi>
NPO法人森ノオト (品川) <https://onl.jp/DCCTFmZ>
地球市民アクトかながわ/TPAK (藤原) <https://onl.jp/pZtKRx8>
ほどがや市民活動センターアワーズ (諸隈) <https://onl.jp/BB3QM88>



ローカルなマテリアルのデザイン The Design of Local Materials



地域の素材を使って
都市と里山をつなげる
Connecting Satoyama to cities using local material

現在、水源地や里山地域の広葉樹の活用方法が少ないという問題がある。広葉樹は針葉樹に比べ、重くて硬いので木材として扱いにくいためである。本プロジェクトは昨年度に引き続き、広葉樹の性質を理解した上で、それぞれの木材に合った活用および地域の状況を鑑みた活動の模索を目的とし、今年度はフレグランス班、木材班、藍染め班の3班に分かれて活動した。

フレグランス班では足柄のミカンや大学内のクスノキを使用したルームフレグランスを製作した。班員自らが取りに行ったミカンの皮やクスノキの葉を加熱し、香りを抽出した。抽出したフレグランスを、班員がデザインしたラベルを貼ったボトルに詰め、オープンキャンパスや常盤祭で販売した。

木材班では大学内、および神奈川県内にて伐採された広葉樹の木材を利用して、それぞれの木材の特徴を活かしたツール制作に取り組んでいる。今年度は、キリ、クワ、クスノキ、ウルシ、ムクノキの5種類を利用した。軽いこと、逆に重いこと、または杓目が美しく出ることなどそれぞれの特徴をどのようにデザインに取り入れるかを考えて制作している。

藍染め班では「糸の町」として有名な神奈川県愛川町の伝統産業である藍染めを行った。クリップやビー玉などを用いて、新しいデザインの藍染めをし、アクセサリを製作し、常盤祭で販売した。学内の銀杏を使った広葉樹染めにも取り組んだ。

今後は、様々な広葉樹に興味を持ってその特徴を知ること、木材のより有効な利用方法、ひいては木材を介して地域の問題を解決することにつなげることができればと思う。また、製作する商品の種類を増やすなどして、より多くの人に広葉樹に関する問題を伝えていきたい。

- 学生数：11名 / 担当教員：志村真紀
- 連携・協力：原口健一准教授（教育学部）
- サイト：Instagram: タグ「#ローカルなマテリアルのデザイン」



アグリッジプロジェクト The Agridge Project



地域とともに、一歩先へ
Making a Better Future with the Local

アグリッジプロジェクトは、農業で人と人をつなげて地域を活性化させることを目的としている。今年度は地域住民・企業とより密接に関わることで、ともに横浜のこれからを盛り上げることに尽力した。

● Agrink 野菜の生産から販売を一貫して行う部門。生産に関しては、プロジェクトメンバーだけでなく地域住民と共同で植え付けや収穫などの作業を行った。また野菜の販売に関しては、学内での定期直売に加え、常盤台コミュニティハウスでの出張直売など地域住民向けの販売にも力を入れた。これらの取り組みにより、農業による地域間交流の促進へと一歩近づいた。

●商品開発 今年度は、横浜ビールと共同で横浜国立大学のオリジナルビール「ハマノワビール」の商品化を手掛けた。地元企業と連携して地域の魅力が詰まった商品を発信することで、地域の経済的活性化へ貢献することを目指した。横国デーや常盤祭などの学内イベントにおいて卒業生や在校生に向けて販売しただけでなく、緑園街マルシェやハザコクフェスタといった地域のイベントにも出店し、横浜・YNUの魅力地域へ広める一役を担った。今後はイベント販売に加えて学内での常時販売も行うことで、学生や地域住民など幅広く手に取ってもらい、「よこはまのわ」がさらに広がっていくことを目標としている。

地域を考えるうえで地域住民・企業は切り離せない存在である。今後もさらに関係性を深めていき、ともに地域活性化の道の手を歩んでいきたい。

- 学生数：12名 / 担当教員：池島祥史、小林誉明
- 連携・協力：藤巻芳明、藤又琢、保土ヶ谷区役所生活衛生課、ヘルスメイト、常盤台コミュニティハウス、常盤台地区連合町内会、大倉山ミエル、ハマノワ、フェリス学院大学、東京ストロベリーパーク、横浜ビール、濱漬・上岡食品、川久保和美、ほか（敬称略）
- サイト：<https://agridge-chiikikasseika.localinfo.jp/>



都市の自然を楽しむライフスタイル The lifestyle to enjoy nature of the city



横浜や、横国学内に生存する
身近な自然との触れ合い
The interaction with nearby nature
which exists in Yokohama and YNU

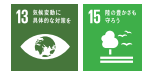
横浜は都市と里山の両方を兼ね備えた地域であることから、そのことを活用して横浜において都市の自然を知り、それを利用するライフスタイルを開発し、地域に普及することを目的として一年間活動してきた。

活動内容の概要としては、毎週木曜日の昼に勉強会をし、休日や長期休暇に行うイベントに関して各自調べてきたことを報告した。

そして今年度は、潮干狩り、横国の山菜を使って料理、魚釣り、横国のどんぐりを使って料理、里山管理などのイベントを報告の内容をもとに企画した。どのイベントでも自然の中での楽しみ方を体験しつつ、調理やバーベキューで学生同士の交流や参加して下さった高校生との交流も深めた。

一年間の活動を通じて、都市の中で里山の暮らしの一部を体験しつつイベントを楽しむことができたので、地域に都市の自然を利用するライフスタイルを普及させるだけでなく市民の憩いの場としての役割をさらに果たしていくことができるようにしたい。また、里山の生活を体験することができるような新たなイベントの形を考え、ぜひ実施していきたい。

- 学生数：13名 / 担当教員：小池文人
- サイト：<http://vegell.kan.ynu.ac.jp/lifestyle/>



かながわ里山探検隊 Kanagawa Satoyama Expedition



里山で陸の豊かさを感じよう
Let's feel blessings of nature in Satoyama!

皆さんは、陸の豊かさからどれだけの恩恵を受けているか、考えたことがありますか。これはSDGsの目標の一つ「陸の豊かさも守ろう」を達成するために必要なビジョンです。昨今の、災害の激甚化、野生動物の都市部進出、生物多様性の低下などは、多大な影響を私たちに及ぼしています。それは一つに、人間と自然が築いてきた関係が崩れてきたからかもしれません。そこで、生物多様性を維持し、人間と自然の共生を果たしてきた里山に注目して、その価値を再発見し、守っていくことが私たちの目的です。

今年度、里山探検隊は、里山に関する輪読や実地調査を行い、よりよい里山の保全に向け活動しました。植樹や田畑の代掻きを行い、そこに生きる生物を守ることの大切さを知りました。またアルプホルンの演奏や、木工細工の体験、米やみかんを自分たちでイチから栽培・収穫したことを通じ、自然の恵みを感じることが出来ました。加えて、里山の資源を利用してもらうため、炭出しやみかんの収穫・販売の支援も行いました。さらに荒廃した森林や台風後の林道を歩き、整備の難しさや自然の恐ろしさを実感しました。総じて、里山での保全活動を通じ、私たちは豊かな生態系からどれだけの恩恵を受け、人間の活動がどれだけ森林や田畑、そこで生きる生物を脅かしているか理解することが出来ました。

今後の展望として、陸の豊かさを守るためには、単に里山で活動を行うだけでは十分でないと感じました。より実践的な保全をするために、農獵の資格獲得や、里山の資源や食材を利用した移動式ピザ窯の作製、及び物産販売など地域の人とより深く広く活動を進めていきたいと思えます。

- 学生数：20名 / 担当教員：小池治
- 連携・協力：七沢里山づくりの会
- サイト：<http://ynusatoyama.wpblog.jp>



データで捉える地域課題・地域経済 2019 Regional Issues and Regional Economy Analyzed by Data



多面的な分析から見る地域経済 Regional Economy from Multifaceted Analysis

当プロジェクトでは、各グループに分かれ、横浜市、神奈川県各セクションをはじめ、相模鉄道、横浜ビー・コルセアーズといった地域の各アクターとも連携しながらプロジェクトを運営している。多様な研究を行っているため、様々な成果がでている。そうした成果を、中間報告会、最終報告会という形で持ち寄り意見交換しながら進めている。

居城グループでは、プロジェクトが5つ存在し、産学連携を行いながらより実践的な活動を意識している。①「江ノ島観光地区における産業連関分析」、②「神奈川東部方面線開業に伴う相鉄本線地域への経済効果」、③「スポーツと青少年育成」、④「愛情弁当の貨幣評価」、⑤「フェアトレードについて」が本年の研究である。各学生が主体的に研究に取り組むことで多面的な研究の実践を目指していることに加え、横浜国立大学ホームカミングデー等、定期的な研究発表も重ねている。池島グループでは、昨年度テーマ「農業の地域循環、経済の地域循環」を継続して調査分析を進めた。第一に、都市農業を対象に、生産から消費に至る流通経路のうち、学校給食における地産地消の流通ルートや消費実態を調査し、学校給食が地域農業の活性化に貢献できる役割を有している点を明らかにした。第二に、箱根町の泊事業者や観光客に対して多くの実態調査を重ね、その調達・消費行動における地理的特徴を明らかにした。岡部グループでは、横浜市の年齢階層別失業率は1995年前後の就職氷河期時代から2010年ころまで高止まりの傾向であったが、その後今日まで低下傾向が続いている。その内実を検討している。氏川グループは、横浜市温暖化対策統括本部・地球温暖化対策推進協議会・関内まちづくり振興会・一戸町等の行政・諸団体、日産自動車・みんな電力等の複数の市内企業と連携して、各団体での温暖化対策・SDGsに資する政策提案を実施した。市内複数大学との報告会では、昨年度に引き続き、受賞する成果も得られた。相馬グループは、(1)中高年ひきこもりと家族支援、(2)リカレント教育の現状と課題、(3)家事の男女共同参画、(4)団地のリノベーションとコミュニティ活性化、について研究を行った。

■学生数：37名 / 担当教員：岡部純一、相馬直子、氏川恵次、池島祥文、居城琢

■連携・協力：横浜市政策局 関口昌幸様、岡崎洋子様



横国ネパールプロジェクト (YNP) THE YOKOKOKU NEPAL PROJECT (YNP)



分からない、何もできない。
でも、だからこそ、やってみる。
Let's try

2015年4月25日に発生したネパール大地震をきっかけに、発足。防災訓練を行ったり、ゲストハウスプロジェクトを行ったりした。現在は、集まった学生がネパールというフィールドで課題を発見し、その解決策を模索していくプロジェクトとなっている。今期からは新たにスタディーツアー班と障害班が加わり、多種多様なプロジェクトが立ち上がっている。

活動は、子ども班・女性問題班・スタディーツアー班・障害班の4つに分かれ、活動している。

●子ども班：春合宿で見た映画をきっかけに「子供達が自由に夢を語れるようになってほしい」という思いから発足。夏の渡航で村を訪問し子供たちの夢を調査。調査結果を元に、現在日本の事例との比較を行う。

●女性問題班：ネパールの人身売買被害者女性や被害に陥りかねない女性の経済支援を目的に、夏渡航では支援者団体へ訪問、インタビュー、フェアトレード用に商品の買い付けを行い、大学祭やスタジアムでの販売を行った。

●スタディーツアー班：現地調査で訪れた際、「現地の方に、復興観光の助力を。」との声を聞き発足。現在、日本全国から集まってくれた有志4人と共に、参加者の自立的思考の養成と共にネパールの実態を感じるべく春渡航に臨む。

●障害班：夏の渡航をきっかけに発足し、障害のある人が「働く」という選択肢を得られるためには何が必要かを考え、活動。春渡航にて、現地での質問紙調査を行う予定。

今後はアカデミックな研究も念頭に置きながら活動を進めていく予定である。課題設定から解決までのプロセスを経験しながら、国際協力分野の内情を知っていく。

■学生数：10名 / 担当教員：小林誉明

地域実践アワード

後援：横浜国立大学 校友会

MVP・準 MVP 賞はの総票数により、校友会賞は社会人・教員の投票数により決定致しました。

Award

- MVP・校友会賞 -

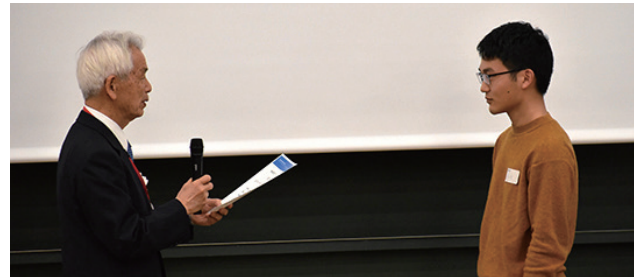
おおたクリエイティブタウン研究プロジェクト

- 準 MVP -

アグリッジプロジェクト

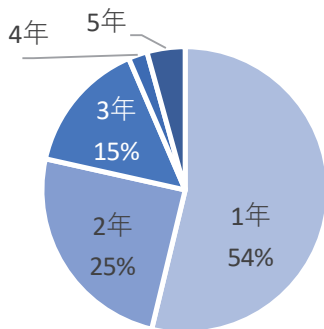
Report

地域連携シンポジウム「地域実践アワード」における発表の際には、プロジェクト内で使った道具を実際に持ってきて紹介したり、私たちがプロジェクトを進めていく中で関わった地域の方々からのメッセージやインタビューを読んだりなど、ただの発表の場としてだけでは終わらせないよう、各プロジェクトの工夫が見られました。プロジェクト内で完結していたことも、聴衆の皆さんに発表をしようとする事で、新しい気付きが生まれることもありました。また、その発表の後にポスターセッションが行われ、興味を持ってくれた方々にだけですが、より掘り下げた説明を出来たため満足な結果で終えられました。どのプロジェクトもこの発表のため準備をしてきたことが分かるような時間となったと思います。(学生代表)

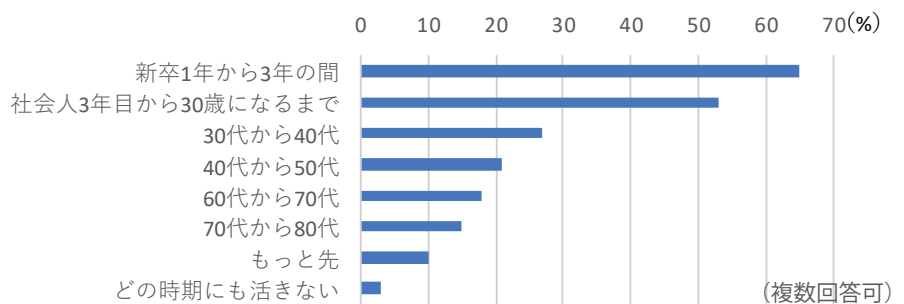


アンケート結果

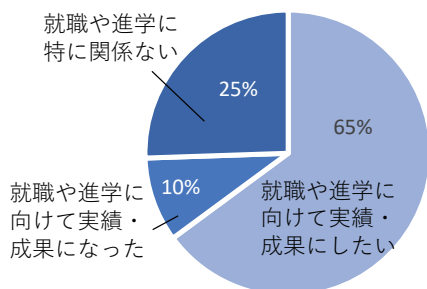
1. 履修・参画年数



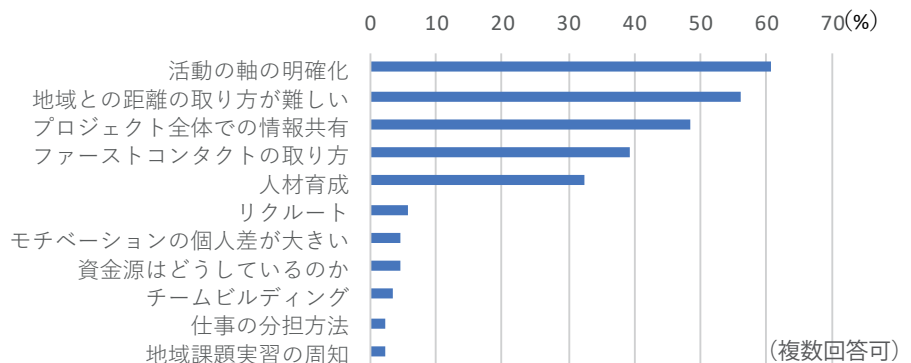
3. 地域課題実習で得たノウハウは自身のキャリアのどの時期に生きて考えますか？



2. 就職や進学において活かそうですか？



4. プロジェクトチームないで困っていることや困った経験のあることはありますか？

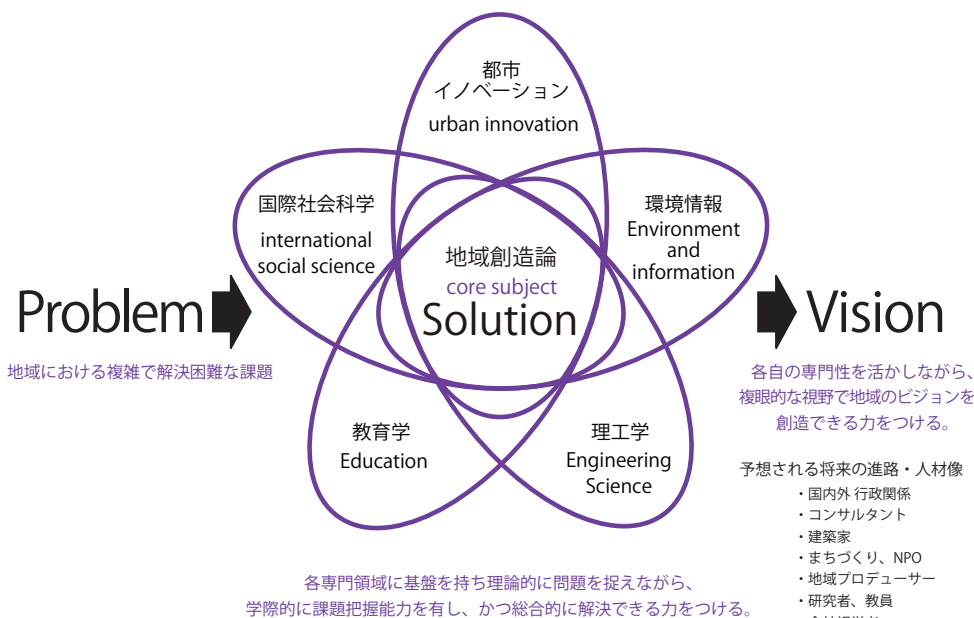


地域課題実習を履修・参画する学生を対象にしたアンケート結果（一部）です。複数年にかけて取組み、就職・進学時をはじめ社会人以降の長い生涯にかけてノウハウを活かしたいと考える人が多い傾向があります。「活動の軸の明確化」等に悩んだ学生が多い特徴がありますが、地域課題実習のメインテーマである「地域課題を解決する実践能力」を身につけるためには、活動の軸や、地域との距離感の取り方、情報共有の仕方について悩むことも貴重な経験となります。担当教員や地域の方にも相談しながら解決に向けて進めていきましょう。

■ 地域創造科目について / About this program

大学院生を対象とした副専攻プログラム「地域創造科目」は、「複雑で解決困難な地域課題を題材に、各専門分野の活かし方を発見し開拓するプログラム」です。2011年度から開講しました。

Towards complex, intractable community issues, this program takes a theoretical approach from the individual fields of expertise, and is a sophisticated educational program which aims to produce individuals who possess the ability to appraise issues from an interdisciplinary approach and propose comprehensive solutions.



2015~2017年度の講義録集
ブックレット：地域創造論 vol.2

ローカルからの発想が
日本を変える、
世界を変える。

ローカルからの発想が
日本を変える、世界を変える。

小池治, 小池文人, 中村由行, 伊集守直,
山崎圭一, 佐藤峰, 氏川恵次, 宮城島崇人,
赤木徳頭, 安藤 仁美・浅野 拓也, 丸尾昭
二, 野原卓, 西田司・伊藤 彩良, 梅野匡俊,
高見沢実

■ コア科目：地域創造論 / Globalized Local Studies 「地域はどう変わるか 2010年代から2020年代に向かって」

これまでのテーマ：「ポスト3.11の新しい地域像」、「ローカルからの発想が日本を変える、世界を変える。」を踏まえて、さらに先の時代に向かって地域創造ができるよう2018年度から「地域はどう変わるか 2010年代から2020年代に向かって」をテーマにしています。前半においては各専門の観点から地域課題を学び、後半は学生が学際的なチームに分かれてグループワークを行い、新しい地域創造に向けた提案・提言を行っています。

■ 講義録

SDGs 未来都市・横浜の挑戦と
“ヨコハマ SDGs デザインセンター”のこれから
ヨコハマ SDGs デザインセンター センター長
信時 正人氏

2015年国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を受け、ここ数年、世界各国、各分野でSDGsを巡る取り組みへの熱が高まっている。横浜市は2001年に環境未来都市に選定されたこともあり、以前から「環境負荷を押さえながら経済的に発展し、市民生活の質を向上させるまちづくり」を積極的に進めてきた。ステージアップしたSDGs未来都市・横浜の実現に向けて取り組みをより深化させるチャレンジと今後の課題について考える。

2035年に当たり前に木材のある社会を目指して
飛騨五木株式会社 企画研究室長
スマレ地域信託株式会社 常務取締役
井上 博成氏

岐阜県高山市に本拠地を置く飛騨五木株式会社（井上グループ）では、一般的に斜陽産業とみなされがちな森林産業をメインに据えたビジネスモデルを展開している。『自然資本から地域を変える』ことを目指し、グループ企業で連携する強みを生かして、林業、製材業、流通、設計、不動産、エネルギー開発…と幅広く展開する事業について伺った。森林資源によって、地域の付加価値を創造することを目指し、研究と実際の活動を常に行き来する井上氏の姿勢が印象的であった。

2020年代に向けた大学と地域
～羽沢横浜国大駅開業を前に～
都市イノベーション研究院
高見沢 実 教授

2019年11月30日、相模鉄道とJR埼京線の直通運転が開始する。新駅「羽沢横浜国大駅」の開業によって、相鉄、地域、大学、行政の連携でどのような取り組みが可能か。羽沢エリアを活性化させ、新駅の価値をあげることは、地域住民や相鉄にとってはもちろん、横浜国大の大学運営においても、今後の少子化・学生数の減少に対応するために重要な位置付けとなる。相鉄、地域、大学、行政の連携でどのような取り組みが必要か、現在進行中のプロジェクトや今後の課題についてお話を頂いた。

2020年代に向けた
ヘリテージマネジメントの課題
都市イノベーション研究院
大野 敏 教授

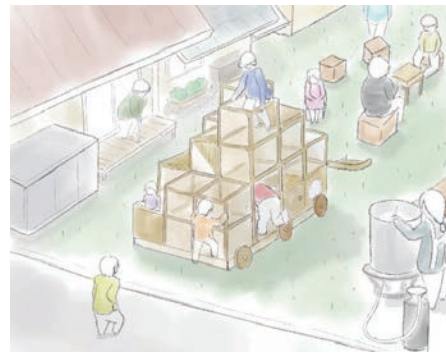
国宝や文化財などは手厚く保護管理されているのに対し、身近な歴史的建造物が人知れず多数消滅している。これを防ぐために、地域の「町医者」的存在のヘリテージマネージャーの取組みは、阪神淡路震災を契機に全国へ広がった。災害対応だけでなく、歴史的資産の発見や維持に関与することが重要で、建造物所有者の体験、思い入れを聞き取り、実測、史的調査、痕跡調査を通して復元の考察を行う。歴史的建造物の資産価値を見直しが進むことで、建造物の観光資産としての魅力を再発見できる可能性もある。

■グループワーク / Group Works

空き家から遊び場へ 移動遊具でつながるコミュニティ

山岸 匠, 遠山 夏子, 楠本 幸司, 孫 宇濠 (都市イノベーション学府) / 陶冶 (国際社会科学府)

我々はコミュニティの「自治」に着目し、西戸部町での新しいまちづくりを提案する。自治会長へのヒアリングからは、路地裏の空き家問題、子育て世代への支援が課題として挙げられた。さらに現地調査と地図を用いた悉皆調査を行い、空き家や狭い道路などの問題を抱えるエリアを抽出した。我々は神戸市などの事例を参考に、空き家の敷地をまとめて空地に変え、移動遊具を巡回させることにより地域の子ども達に遊び場を提供する。さらに移動する倉庫として活動に必要な道具を運ぶことで、公園ではできない自治体の活動や、まちの見守り制度を活用した地域全体での子育て支援などを行う。空地を中心に小さなスケールでの自治活動を展開し、より西戸部町における自治の輪を広げていくことを目的とする。



鎌倉空き家と外国人観光客

LIU HAN, 齋藤 良太, 遠山 匠 (都市イノベーション学府) / WANG JUE, 張 瑞瑞 (国際社会科学府)

鎌倉は日本全国共通の空き家問題に直面している。腰越地区においては漫画の聖地として主に中国人観光客がたくさん訪れており、オーバーツーリズムとも呼べる状況となっている。この観光客の大部分がこの場所のみ訪れ、東京に戻ってしまうということがヒアリング調査から分かった。上質で反復性のある観光に、観光客を鎌倉全体に、外部から移住者を募る、ということを経由して空き家問題を解決に導く。腰越地区の二つの空き家を、漫画制作を間近で見学、体験できる漫画ミュージアム、まちやどのレセプション機能をもったコミュニティカフェとし、一度きりとならない上質な観光、地域の観光キャパシティ拡大と観光客の分散によるオーバーツーリズム解消を実現し、まちがより豊かになることを目指す。



学生参画による羽沢地域の農業ブランド化ぶらっと!はぎ 'WA'

稲木 俊一, 池田 裕之, 小川 岳志 (都市イノベーション学府), 長浦 弘樹 (理工学府)

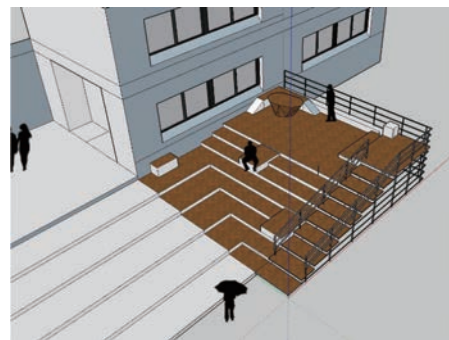
羽沢地域では農業が盛んで、点在する直売所の野菜は鮮度や風味の点で、市場に出回るものに大きく勝る魅力を持っています。しかし近年は農家の人手不足が目立ち、手が回らず放置される農地が見られます。また多くの農家が自分の作業で手一杯のため新たな活動に手を出せず、このままでは衰退が予想されます。そこで、農家とお客さんの間に学生が立ったマルシェと貸し農園を提案します。昨年11月の羽沢横浜国大駅の開業によって向上した都心部からのアクセスを活かし、マルシェの場として新駅の大学拠点の提供や、学生を介した貸し農園による空き農地の活用を行います。学生側には直売所の建築や経営に関するコンペにより、発案に留まらない現場経験や多学部横断の機会を提供し、積極的な参加を促します。



神奈川県材を身近に利用 ~広葉樹及び森林資源活用~

易 傲霜, 菊池 薫和, 細見 遼太郎, 井本 悠太 (都市イノベーション学府)

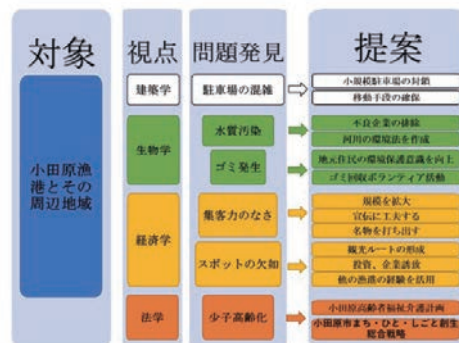
これまで荒廃してきた広葉樹林を公益的、多目的機能から資源と捉える重要性が今日では考えられる。しかし横浜市では広葉樹林を多く抱える一方その活用例がほとんど無く、我々が身近に広葉樹を感じる機会は少ない。まず、コワーキングスペースでの木材の利用を提案する。机や椅子、壁面に神奈川県材を利用することで、若い人たちが日常生活の中で木を身近に感じられるようにする。ブナで作られた机とケヤキで作られた机を配置し、それぞれの広葉樹の説明文を机上のプレートに記す。次に横国内の空き地の活用を提案する。学内で弁当を食べる場所が少ないという苦情がある中、建築学棟に近くにあるプラットフォームの放置を解消することに意義を感じる。したがって、開放的で誰もが利用しやすいスペースを提案する。



SDGs 視点から見る小田原漁港の展開

王 燦淋, 鄭 雁菁, 馬 蘭 (国際社会科学) / 水野 祐貴 (国社) / 盛 艶, 李 兆軒 (環境情報)

我々は「SDG14. 海の豊かさを守ろう」に着目し、神奈川県内の小田原漁港とその周辺地域を研究対象とした。周辺地域には日本初の漁港の駅である「TOTOCO 小田原」がオープンしたばかりで、地域の問題は時々刻々と変化している状況であった。我々は四つの専門的な視点から各自の研究方法を検討し、フィールドワークと文献研究を通じて、現状における問題を6つに集約し、それぞれの問題を複数の提案で解決する形で、合計14つの提案により問題の解決を目指した。



-1. 研究の柱

地域実践教育研究センターでは4つの研究テーマの柱を設け、学内における学際的な研究活動を推進しています。

(1) 「住みたい都市」に関する研究

地域実践センターの研究部門では、当初より「住みたい都市」を包括的テーマとして掲げています。近年、「住みたい都市」が注目されるのは、単にそこで暮らしたいばかりでなく、そのような都市で働きたいと思っている人々が多くなっていることと関係していて、結果的にそうした地域は経済的にも持続的に発展しているとみられています。



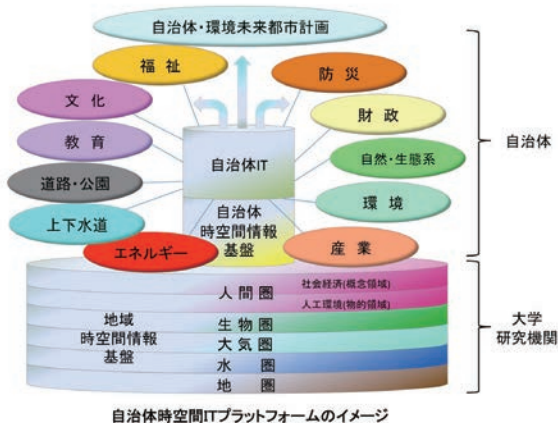
(2) 「防災・事前復興・復興」に関する研究

平成25年度から26年度の2年間にかけでは、神奈川県の大卒政策提案制度の採択事業として「県民総力戦による事前復興計画」について教員と学生の総計29名による学際的な研究を行いました。県内で津波による被害想定が高いとされる逗子市では、住民や市議会議員等による住民参加型の検討会・シンポジウム・ワークショップを重ね、具体的な政策内容を提案しました。2018年度には、逗子市における事前復興や防災に関する「津波避難シェルターの体験」をはじめ、講演やワークショップを数回にわたり開催されました。



(3) 「地球環境未来都市」に関する研究

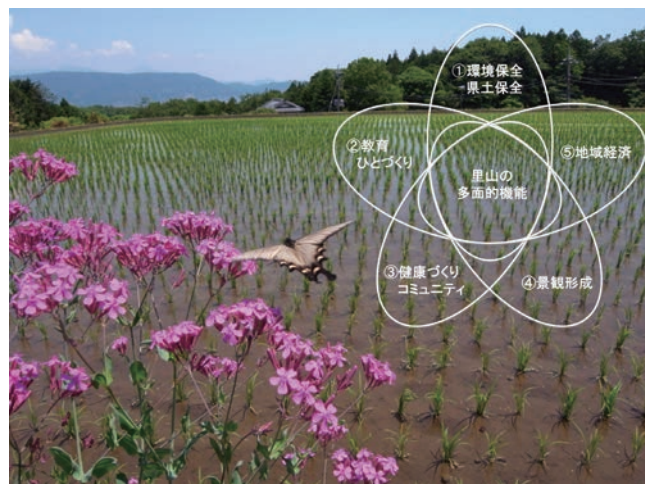
地球環境未来都市研究会を設置して、地球環境の有限性をふまえた未来都市のあり方を研究しています。具体的には神奈川県拡大流域圏（水道による人工的な水の移動も含めた流域）を対象に、おもに横浜市と水源地域の都留市と連携して、実践的な研究を行っています。横浜市については、同市が進める「みなとみらい2050プロジェクト」に関連した研究を行うために、「エネルギーデザイン」「エコロジーデザイン」「モビリティデザイン」「ICTプラットフォーム」の各研究部会を設置して、みなとみらい21地区の将来像について検討しています。また、都留市については、エコミュージアムをはじめとした地域資源を活かすこれからの環境まちづくりに関わるさまざまな研究活動を行っています。



(4) 「里地里山」の保全効果に関する学際的研究

神奈川県の大卒政策提案制度の採択事業で、2015年度から2016年度の2年間で神奈川県内の里地里山保全活動の効果について学術的に検証しました。調査研究にあたって地域実践教育研究センターに5つの研究部門（地域経済、景観形成、環境・県土保全、健康・コミュニティ、教育・ひとづくり）を設置し、県内の里地里山保全に関する学際的研究を行い、研究成果は報告書にまとめられました。

2019年は、神奈川県大卒政策提案制度における採択事業「Woody ～広葉樹の活用による地域活性化と県民の健康増進」を学際的メンバーで実施しています。



-2. 地域研究

横浜国立大学 地域実践教育研究センターの関連教員を通じて集められた地域に関する研究です。

研究内容については「横浜国立大学 学術情報レポジトリ」のサイトから検索・閲覧できます。 <https://ynu.repo.nii.ac.jp/>



No.	論文タイトル名	執筆者, 担当教員名
1	地域における学生居住が高齢期の暮らしや地域活動にもたらす影響に関する研究	磯崎透子, 大原一興, 藤岡泰寛
2	過疎化した離島における移住者の定着に関する研究 - 隠岐郡海士町を事例として -	内田貴則, 大原一興, 藤岡泰寛
3	高低差のあるキャンパスユニバーサルデザインに関する研究 - 横浜国立大学常盤台キャンパスにおける屋外エレベーター設置および周辺整備からの考察 -	知念泰平, 大原一興, 藤岡泰寛
4	空間条件から見た学校博物館に関する研究 - 横浜市立小学校における歴史民俗系の活動を事例とした考察 -	千葉汰一, 大原一興, 藤岡泰寛
5	旧療養所建築の博物館的活用に関する研究 - 茅ヶ崎市 南湖院を事例として -	松田美紗, 大原一興, 藤岡泰寛
6	若者ホームステイ民泊が受け入れ高齢家庭にもたらす影響と持続可能性に関する研究 - 陸前高田市広田町の民泊事業を例にして -	山本 響, 大原一興, 藤岡泰寛
7	建築物保存からみたエコミュージアム活動の可能性に関する考察 - 行政と市民の連携に着目して -	照沼翔大, 大原一興, 藤岡泰寛
8	公共図書館における地域資料の活用に関する施設計画の研究	宮城仁美, 大原一興, 藤岡泰寛
9	医療的ケアが必要な子どもとその家族の在宅生活環境に関する研究	金山侑以, 大原一興, 藤岡泰寛
10	地域情報と住民の地域意識に関する研究 - 常盤台・羽沢地域におけるサインづくりを通して -	末木龍暉, 大原一興, 藤岡泰寛
11	美術館の付加的施設の建築計画の考察	青沼駿介, 大原一興, 藤岡泰寛
12	屋外公共空間での着座者のくつろぎと空間要素に関する研究 - 都心臨海部の山下公園・象の鼻パーク・横浜港大棧橋を対象として -	佐藤栄太, 高見沢実, 野原卓
13	多文化共生都市の実現に向けた外国人の支援・交流拠点のあり方について - 横浜市中区・南区のケーススタディを通して -	高橋洋貴, 高見沢実, 野原卓
14	秋葉原の活気の実態に関する研究 - 建物用途・規模・築年数に着目して -	高橋良, 高見沢実, 野原卓
15	商店街周辺店舗固有の魅力の実態に関する研究 - 新潟市古町地区を対象に -	田代静瑠, 高見沢実, 野原卓
16	商店街の歩行空間における個々の建物と街路による街並みの調和についての研究 - 横浜市中区関内地区の馬車道を対象として -	中西豊, 高見沢実, 野原卓
17	まちづくり拠点の機能と新たな役割の可能性に関する研究 - 横浜市を対象として -	小川明穂, 野原卓, 高見沢実
18	メタボリズム思想の都市への適用実態とその課題に関する研究 - 黒川紀章による菱野ニュータウンに着目して -	河瀬一輝, 野原卓, 高見沢実
19	創造界隈を形成する民間主導の遊休不動産活用とその連鎖に関する研究 - 横浜関内地区を対象として -	菊池諒, 野原卓, 高見沢実
20	未成熟な制度下における再開発の造成課程に関する研究	高橋亮, 高見沢実, 野原卓
21	郊外住宅団地における配置計画手法と利用実態の関係性に関する研究 - 若葉台団地を対象として -	戴桐欣, 高見沢実, 野原卓
22	地域に開かれた場における利用者の交流の生まれ方に関する研究 - 熱海銀座商店街の二店舗を対象にして -	古内裕之, 江口亨
23	地域に開かれた場における場の使われ方と利用実態に関する研究 - ひばりが丘団地の「ひばりテラス118」を対象として -	後藤大輝, 江口亨
24	公立小学校の体育館における夏季の温熱環境に関する研究	森山 瞳, 張 晴原, 田中 稲子
25	駅の改札における上下線判別のための電車到着サイン音の効果に関する研究 - 相鉄線の駅を対象にして -	久湊 行起, 張 晴原, 田中稲子, 船場ひさお
26	ベトナムの首都ハノイにおける路線バスの利用促進に関する研究	Trinh Thi Thao, 中村文彦
27	移動に対する価値基準の多様性に関する研究	若原 歩花, 中村文彦
28	交差点停止時の車間距離の経年的変化の分析	宮村 隆人, 田中伸治
29	途上国都市における歩行空間比較からみた 持続可能な都市の評価に関する研究	藤本優加子, 中村文彦
30	バス走行区間としての補助幹線道路の走行性能の評価	野本真太郎, 田中伸治
31	高速道路 PA 案内誘導設備が駐車場の流動性に及ぼす効果の評価	岩沢 誠, 田中伸治
32	琉球ブルーオーシャンズが沖縄県に与える経済波及効果	金城功祐, 居城琢
33	進みゆく「野球離れ」と BC リーグの現状	國重真輝, 居城琢
34	横浜 DeNA ベイスターズが横浜スタジアム周辺の飲食店にもたらす経済効果について	丸澤慧太, 居城琢
35	高校野球神奈川大会が横浜市に与える経済効果	大川智己, 居城琢
36	横浜市の民泊施設がもたらす経済波及効果	大山純平, 居城琢
37	神奈川東部方面線開通に伴う IT 関連サービス企業の誘致・発展による 旭区 への経済効果 への経済効果	岡部亮太, 居城琢
38	横浜国立大学大学祭の経済効果	財津俊貴, 村田淳, 居城琢
39	東京都の機能分析	宮内力, 居城琢
40	江ノ島観光地区における産業連関分析	岡本進太郎, 居城琢
41	「愛情弁当」の貨幣評価	松葉駿平, 居城琢
42	神奈川東部方面線開業に伴う相鉄本線地域の経済効果	榛葉考祐, 居城琢

-3. 受託研究・寄付事業

地域実践教育研究センターでは、大学内における学長戦略経費による重点プロジェクトの他にも、自治体・事業者・NPO等からの委託調査・研究・事業を受け入れています。学際的な教員・学生によるチームを構成し、教員による専門性と学生による豊かな発想をもって成果を出しています。

(1) 重点プロジェクト：「地域課題実習」学生による世界的な地域課題研究テーマの発見：ネパールにおける調査・活動，韓国慶尚大学とMOU（大学間協定）締結に向けた交流，韓国国際フォーラムにおける講演

●ネパールにおける調査・活動

2015年に大地震により被害を受けたネパールにて、「横国ネパールプロジェクト」では今年度、人身売買のリスクがある女性の経済支援、ネパール地震を



踏まえて若者たちの自立に向けた復興観光の推進、障害のある人が労働機会を得るための方策、子供たちの夢を調査し日本と比較分析をする調査活動を実施しました。今後ともアカデミックな研究も念頭に置きながら活動を進めていきます。

●韓国慶尚大学とMOU（大学間協定）締結に向けた交流

近年、韓国においては地域貢献に関する活動が積極化しており、大学においても地域活性化のための教育プログラムを導入する動向があります。このような状況を踏まえて、2019年1月に慶尚大学の李センター長と張先生が来日し、当地域実践センターによる取り組みを紹介したことをきっかけに、国際フォーラムにおけるセッションをはじめ、MOUの締結に向けた交流事業を行いました。交流事業では慶尚大学の学生による発表をはじめ、横国からは、みなとまちPJ、和田べんPJ、アグリッジPJ、ネパールPJによる発表をしました。



●韓国国際フォーラムにおける講演

韓国にて開催された国際フォーラム“2020 Gyeongnam Social Innovation Global Forum”において、「横浜国立大学地域交流科目・地域創造科目の運営による地域社会イノベーション事例」について志村准教授により講演発表をしました。発表を踏まえて、今年で16年目となる地域交流科目が日本の中でも先駆的かつ継続して運営されていることや、履修学生が非常に多い点や、地域課題実習を複数年にわたり履修・参画している学生が多いことに大きな反響がありました。帰国後には、フォーラムに参加した学生達により、地域課題実習にトライする学生達のモチベーションやリテラシーの高さを把握するためにアンケート調査を行い、その結果を「地域連携シンポジウム」にて発表しました。

(2) 神奈川県 大学発・政策提案制度：

Woody～広葉樹の活用による地域活性化と県民の健康増進～

神奈川県は水源地域の森林資源を保全するため水源環境保全税を創設し、全国に先駆けて水源地域の森林保全に取り組んできました。しかし、主な対象は奥山地域の人工林であり、神奈川県の森林面積の6割を占める広葉樹林の多くは整備が行われず荒廃が進んでいます。広葉樹林は日本人に多くの恵みをもたらす、持続可能で健康的な生活文化の発達に貢献してきましたが、エネルギー革命による薪炭利用の激減に加え、市場への流通が難しいため、広葉樹は利用されず負の遺産と化しています。神奈川県は「かながわの森林再生50年構想」を策定して里山エリアの広葉樹林の保全を支援する一方、「木づかい運動」をつうじて県産材の活用を働きかけていますが、事業者や県民の関心を呼び起こすまでには至っていないのが現状です。

そこで、2019～2020年度にかけて神奈川県大学発・政策提案制度として採択された「Woody～広葉樹の活用による地域活性化と県民の健康増進」に関する学際的研究を実施しています。

当研究では、GIS（地理情報システム）による県内の広葉樹林の現況把握、神奈川県内の広葉樹の多様性が維持される進化生態学的メカニズムを明らかにする調査研究や、広葉樹林におけるヨガ体験等とストレスの関係について生理学的指標や心理学的指標などを用いて実証実験を行い、広葉樹林の健康効果を多面的に把握する研究



を進めています。

アート・デザイン面からのアプローチとしては、中学校美術科の授業の中で広葉樹関わる美術教育活動を展開するプロジェクト、広葉樹各種組成の違いを活かした「音」に注目した打楽器の開発、そして広葉樹を用いた家具のデザイン・制作が行われています。

また、市町における広葉樹林の余暇活動に関する意見交換や、観光への商品化に関する専門家へのヒアリング、持続可能な森林資源利活用の条件に関する聞き込み、そして美しい広葉樹林50選に関する募集を行っています。

●Woodyに関わる研究：小池治・氏川恵次・小林誉明（国社）/小池研二・原口健一・岡拓海（教育）/元山愛梨（附属横浜中学校）/佐藤峰（都市イノベ）/酒井暁子（環境情報）/福榮太郎（保健管理センター）/志村真紀（地域センター）/かながわ里山探検隊/ローカルなマテリアルのデザインプロジェクト

地域連携推進機構

Organization for Local Collaboration Networking



地域連携推進機構について

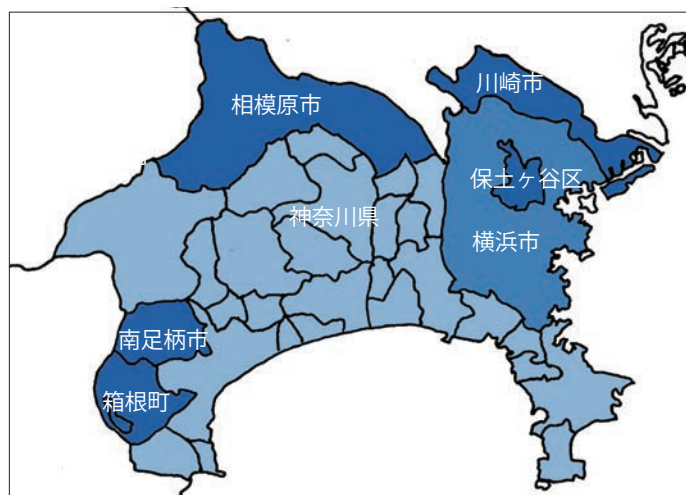
地域連携推進機構は、地域連携活動および地域課題解決への先導的役割等を果たすとともに、地域社会と連携する中核拠点となるため、2017年4月に設置されました。地域に信頼され、地域に支えられ、地域の発展を支援するという、横浜国立大学の地域戦略における3つの精神を軸に、本学の研究力や教育力を地域問題解決へ還元し、大学として積極的に地域連携活動を推進していきます。

地域実践教育研究センターは2019年度から、成長戦略教育研究センターは2020年度から機構内センターとして位置付けられました。



地方自治体との連携協定

本学では、各地方自治体や事業者等と連携協定を結ぶことによって、より充実した教育活動や研究成果を創出・提供しています。



連携協定を締結している地方自治体

Next Urban Lab

ネクスト・アーバン・ラボでは、ヨコハマ、かながわ地域を主なフィールドとして教育・研究・実践活動を行い、その成果を発信する仕組みです。地域のひとびとや、行政・企業・NPOなどと連携して、ヨコハマ、かながわ地域ならではの魅力を活かした地域のナレッジベースの構築をめざしています。

No.	ユニット名	代表者
1	支える人を支えるプロジェクト	井上果子
2	かながわ観光・環境まちづくり	氏川恵次
3	地域間協カラボ	梶島洋美
4	都市の自然環境とひとの生活	小池 文人
5	ヨコハマ海洋環境みらい都市研究会	松田裕之
6	ユネスコ「人間と生物圏」計画支援ユニット	酒井 暁子
7	みうらからはじめる研究会	高見沢実
8	常盤台まちづくり応援団	大原一興
9	「もっと横浜」プロジェクト	川添裕
10	地球環境未来都市YNU拠点とみなとみらい21地区の連携研究ユニット	佐土原聡
11	郊外居住のクリエイティビティとサステナビリティ	藤岡泰寛
12	ヨコハマ型リノベーションの実践	江口 亨
13	地域社会共生ユニット	齊藤麻人
14	都市空間研究会—交通の未来と都市デザイン	吉原 直樹
15	ポピュラー文化を活用した羽沢横国大駅・大学間通学路の2.5次元化プロジェクト	須川亜紀子
16	新音響文化研究会	中川克志
17	環境小国家研究会—環境法とエコミュージアムの交差点から考える	樽沼 範久
18	羽沢横国大駅 環境デザイン	田中稲子
19	ローカル・ブランド・ラボ	藤原徹平
20	ちがさき遺跡まちづくりプロジェクト	小清水 実
21	科学技術コミュニケーションユニット	澁谷忠弘
22	南足柄イノベーションプログラム2019	泉宏之
23	DESIGN-KANAGAWA	中村文彦
24	かわさきよいまちづくりプロジェクト—川崎市教育委員会との高校生科学研究実践活動連携事業	金子直哉

水すまし基金

- 横浜・神奈川の水源地を保全するための研究を実施しています。
- ・神奈川の水源林再生と企業のサステナビリティ活動（八木裕之 / 国社）
- ・神奈川ダム湖のプランクトン食物網の解明（鏡味麻衣子 / 環境情報）

※ Next Urban Lab の各ユニットの内容は地域連携推進機構の HP サイトにて紹介をしています。検索：

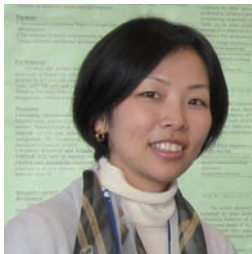
■ 機構長



中村文彦
Fumihiko NAKAMURA

副学長（国際・地域担当）、
地域連携推進機構長、
都市イノベーション研究院・教授
都市交通計画

■ 兼務教員



田中稲子
Ineko TANAKA

都市イノベーション研究院、
都市科学部・准教授/
建築環境工学、住環境教育

■ センター長



氏川恵次
Keiji UJIKAWA

地域実践教育研究センター・
センター長/国際社会科学研究院、
経済学部・教授/環境経済、
経済政策(含経済事情)

■ センター専任教員



志村真紀
Maki SHIMURA

地域実践教育研究センター・
准教授/ 地域・都市デザイン
建築意匠, デザイン学



池島祥文
Yoshifumi IKEJIMA

国際社会科学研究院, 経済学部
准教授/ 農業経済学, 地域経済学



海老原修
Osamu EBIHARA

教育学研究科, 教育学部・教授
スポーツ科学, 応用健康科学



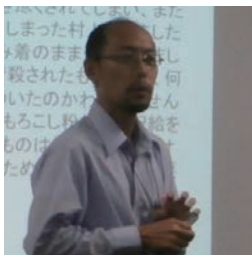
小池研二
Kenji KOIKE

教育学研究科, 教育学部・教授
教科教育学, 美術科教育



小池治
Osamu KOIKE

国際社会科学研究院(法律学)
教授/ 行政学, 公共政策論



小林誉明
Takaaki KOBAYASHI

国際社会科学研究院（法学）
准教授/ 政治経済学, 国際協力論,
開発政策研究, ODA政策研究



居城琢
Taku ISHIRO

国際社会科学研究院, 経済学部
准教授/ 地域経済論, 産業連関論,
中小企業論, 環境経済論



鶴見裕之
Hiroyuki TSURUMI

国際社会科学研究院, 経営学部
准教授/ 経営学, 商学



佐藤峰
Mine SATO

都市イノベーション研究院,
都市科学部, 准教授/ 国際開発学,
社会人類学, コミュニティ・デザイン



藤岡泰寛
Yasuhiro FUJIOKA

都市イノベーション研究院,
都市科学部, 准教授/
建築計画, 都市計画



松行美帆子
Mihoko MATSUYUKI

都市イノベーション研究院,
都市科学部・教授/
都市計画, 開発途上国都市論



本藤祐樹
Hiroki HONDO

環境情報研究院・理工学部
教授/ 技術評価論, エネルギー
環境システム分析, ライフサイクル
アセスメント, エネルギー心理学



小林剛
Takeshi KOBAYASHI

環境情報研究院・都市科学部
准教授/ 環境安全化学, 化学物質
管理, 都市環境汚染



鳴海大典
Daisuke NARUMI

環境情報研究院・都市科学部
教授/ 建築環境・設備,
都市計画・建築計画
環境影響評価, 人間環境学



中村一穂
Kazuho NAKAMURA

工学研究院・准教授
化工物性・移動操作・単位操作,
生物機能・バイオプロセス

*2020年度における関連教員を掲載しています。

■ 副専攻プログラム 担当教員



内海宏
Hiroshi UTSUMI

非常勤講師(地域連携と都市再生A)
地域・地区計画, 市民協働論
地域・市民まちづくり論



岡部純一
Junichi OKABE

国際社会科学研究院, 経済学部
教授/経済統計学, 社会統計学,
途上国統計制度論



山崎圭一
Keiichi YAMAZAKI

国際社会科学研究院, 経済学部
教授/途上国経済, ブラジル研究,
都市住宅政策, 住宅金融



関 ふ佐子
Fusako SEKI

国際社会科学研究院(国際社会
科学部門)・教授/社会保障法・
高齢者法



大森明
Akira OMORI

国際社会科学研究院, 経営学部
教授/マクロ会計, 環境会計,
サステナビリティ会計



相馬直子
Naoko SOMA

国際社会科学研究院, 経済学部
教授/福祉社会学, 社会政策学



伊集守直
Morinao IJU

国際社会科学研究院, 経済学部
教授/財政学, 地方財政論



高見沢実
Minoru TAKAMIZAWA

都市イノベーション研究院,
都市科学部・教授・学長補佐
(地域担当)/都市計画



佐土原聡
Satoru SADOHARA

都市イノベーション研究院,
都市科学部・研究院長・教授/
都市環境工学, 都市のレジリエンス,
地理情報システム(GIS)



藤掛洋子
Yoko FUJIKAKE

都市イノベーション研究院,
都市科学部・教授/文化人類学,
開発人類学, ジェンダーと開発,
パラグアイ地域研究



吉田聡
Satoshi YOSHIDA

都市イノベーション研究院,
都市科学部・准教授/
建築環境・設備



田中伸治
Shinji TANAKA

都市イノベーション研究院,
都市科学部・准教授/
交通工学, 交通運用, 交通シミュ
レーション, ITS(高度交通システム)



稲垣景子
Keiko INAGAKI

都市イノベーション研究院,
都市科学部・准教授/
都市・地域防災, 空間解析



野原卓
Taku NOHARA

都市イノベーション研究院,
都市科学部・准教授/
都市計画, 都市デザイン



藤原徹平
Tepei Fujiwara

都市イノベーション研究院,
都市科学部・准教授/
建築設計・建築意匠



江口亨
Toru EGUCHI

都市イノベーション研究院,
都市科学部・准教授/
建築構法計画, 建築生産



松田裕之
Hiroyuki MATSUDA

環境情報研究院, 都市科学部
教授/生態・環境, 水産資源学,
環境リスク学, 環境生態学



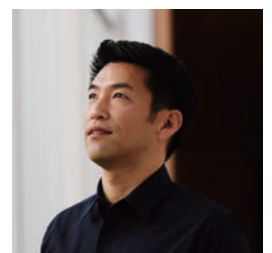
小池文人
Fumito KOIKE

環境情報研究院, 都市科学部
教授/生態・環境, 生物資源
保全学



秋元康幸
Yasuyuki AKIMOTO

地域連携推進機構・客員教授
都市政策, 都市デザイン



山崎満広
Mitsuhiro Yamazaki

地域実践教育研究センター
客員教授/都市デザイン,
地域経済開発, 新規事業開発

■ 客員教員

地域実践教育研究センターから発行された ブックレット・報告書

地域実践センターのHP (<http://www.chiki-ct.ynu.ac.jp>)からダウンロードできます。

2017.3発行

地域創造論 vol.2



- ローカルからの発想が日本を変える、世界を変える。 -



大学院の副専攻プログラムのコア科目として開講されている「地域創造論」の、2015年から2017年度のテーマは、「ローカルからの発想が日本を変える、世界を変える。」でした。本著は、その講義録をまとめたものです。

はじめに 高見沢実 / 政策形成へのアプローチ 小池治 / まちづくりと自然環境 小池文人 / 里海：海洋国日本の可能性～里海資源論の可能性 中村由行 / 里山の保全と活用～神奈川の取組を中心に～ 小池治 / 日本とスウェーデンの比較にみる福祉と地方財政 伊集守直 / 外国人労働者の問題と地域づくり 山崎圭一 / 多文化共生—大学と地域の幸福な付き合い方の条件 佐藤峰 / コラム；経済的視点で地域を捉える 氏川恵次 / 地域を資源化する建築的デザインとコンセプト 宮城島崇人 / 地方と都市-ローカルシステム 新ライフスタイル 赤木徳頭 / 1000年に1度の災害を経て南三陸が選んだ、これから 安藤仁美・浅野拓也 / コラム：3Dプリンターが拓く次世代ものづくり 丸尾昭二 / ファブ・クリエイティブ都市論 野原卓 / 建築家と地域連携 西田司・伊藤彩良 / 地域と地域の関係-現在・今後 梅野匡俊 / 大学と地域連携 高見沢実

2020.4発行予定

横浜国立大学 地域実践教育研究センター 地域課題実習・地域研究報 2019年度



2019年度の地域課題実習と、横浜国立大学内の地域実践教育研究センターに関わる教員を通じて集められた地域に関する研究がおさめられた報告書です。

研究論文の各梗概は「横浜国立大学 学術情報レポジトリ」のサイトからも検索・閲覧できます。
<http://kamome.lib.ynu.ac.jp/dspace/>



■ 問合せ・連絡先

横浜国立大学
地域連携推進機構
地域実践教育研究センター

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-3

横浜国立大学 経済学部1号館 406号室

TEL&FAX : 045-339-3579

E-mail : chiki-ct@ynu.ac.jp

URL : <http://www.chiki-ct.ynu.ac.jp>

